



東ティモール  
民主共和国

# 大野市 「水への感謝を世界へ」 「水への恩返し」Carrying Water Project

「Carrying Water Project (キャリング ウォーター プロジェクト)」は、大野市が地方創生の新しい試みとして展開している。水を軸にした地域ブランディングのための施策。取り組みの内容を、視察報告会の様子と併せて紹介する。



大野市

## 水の恵みを世界へ、 そして未来へつなげる

### 大野市 「水への恩返し」 Carrying Water Project

「水への恩返し キャリング ウォーター プロジェクト」(CWP)は、大野市が2015年から取り組む地方創生のための試み。名水のまち・大野の歴史や文化、伝統を支えてきた「水」の可能性や魅力をさまざまな形で国内外に発信することで、大野の認知度、魅力度を高める。さらに市民に「水を通じた地域への自信と誇り」を持ってもらい、一致団結、協力、共創しながらまちの活力の向上、交流人口の拡大、雇用の創出などにつなげることを目指す。2016年には公益財団法人日本ユニセフ協会(以下日本ユニセフ協会)とパートナーシップを結び、厳しい水環境におかれている東ティモール民主共和国への支援に着手。「水への恩返し」を合言葉に、水を通じての世界貢献をスタートさせている。これは全国の地方自治体では初の、地域と使用目的を限定した支援で、地域に根差した新しい形の地方創生として全国から注目されている。

### ユニセフと日本ユニセフ協会について

ユニセフ(国際連合児童基金)は150以上の国と地域で、子どもたちの命と健やかな成長を支えるために活動する国連機関。日本ユニセフ協会は、現在先進国を中心に34の国と地域に設置されているユニセフ協会(国内委員会)の一つ。日本国内において、民間のユニセフ基金を集めるほか、ユニセフの活動や世界の子どもたちの状況を伝える広報活動、また「子どもの権利」の実現を目的としたアドボカシー活動(政策提言)に取り組んでいる。



© UNICEF/Timor-Leste/2015/Fbrusul

企画・制作/福井新聞社 営業局

大野のアイデンティティ「水への誇り」をカタチに

日本百名山の「荒島岳」をはじめ四方をくもりと山々に囲まれた大野の地形は自然の循環装置のようにもなっている。山に降った雨や雪はけ水がじりじり下り、適度な湿度ミネラルを含んだ湧き水となつてまちは潤っているのだ。名水百選に選ばれた御清水もあり、水質の良さは全国的にも知られている。



大野では今も地下水を使う家庭が多く、日々地下水の恩恵を受けながら、豊かな湧水文化を育んできた。人々は名水のまちに暮らすことに誇りを持ち、水は大野人のアイデンティティとさえ言える。しかしその歴史はたゞ連絡と続いてきたわけではなく、高度成長期の1970年代以降、降水量の変化などで地下水位が低下し、干戸枯れが多発。このことに加え、「水は限りある貴重資源」ということを強く認識させたという。それから今日に至るまで、観測井戸の設置、毎日の水位の計測など、さまざまな地下水保全活動が行われている。

### 地方自治体では初の明確な目的を持った支援

CWP(キャリング ウォータープロジェクト)はこうした経緯から、大野の人々に水の感謝の気持ちをもち、水の有り難さを再認識してもらうこと、さらにはその思いを「水への恩返し」としてカタチにするという発想から始まっている。その活動は国内の水資源保全にとどまらず、ついに世界へと発信された。大野市が掲げる「水と子ども」という二つのテーマに基づき、国境を越えてできる社会貢献を考えた結果、ユニセフが実施する水支援プロジェクトのサポートを決定。2016年に日本ユニセフ協会(ハートナシ)と提携し、2017年からの年間かけて、東ティモールへの支援を行う。ユニセフ基金では初めて、自治体



400年の歴史を持つ名水のまち  
大野市は、面積のおよそ5分の1の大きさを占める。その9割を森林が占める。地下水に恵まれ、名水のまちとして有名。「清水(しずく)」と呼ばれる湧水が市内の至る所に湧き出ている。1580年頃に築かれた大野城は、市のシンボルの存在で、現在では「天空の城」として知られる。ふもとに広がる基盤目状のまち並みは、かつての城下町の面影を色濃く残し、「北陸の小京都」とも呼ばれる。市全体で水環境の保全に取り組む姿勢が評価され、2013年日本水大賞の環境大臣賞を受賞

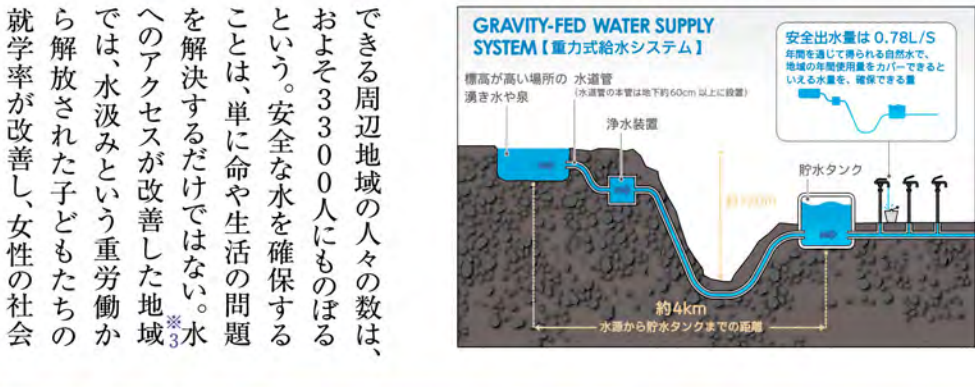
福井県大野市  
●面積 872.43km<sup>2</sup>  
●人口 3万4788人 (2017年1月現在)  
●名所 越前大野城、七間朝市、御清水ほか  
●特産品 米、里芋、そば、日本酒、醤油



撮影 川端真明

### 安全な水を確保できる割合がアジアで最も低い国

CWPで支援を決めた東ティモール民主共和国(以下東ティモール)は、2009年に独立を果たしたアジアで最も若い国。独立後は政府による国造りが急ピッチで進められてきたが、生活インフラの整備はまだ進んでいないのが現状だ。2015年の国勢調査によると、改善された飲用水源を利用する人の割合は世界各国の平均が91%、日本は100%なに対して、東ティモールはアジアで最下位の72%と、水環境の厳しさをうかがわせる。



東ティモール民主共和国は、ティモール島の東半分を占める山岳部が多い島国。16世紀前半のポルトガルの始まり、長く植民地の歴史が続いた。1999年には分離独立を問う住民投票が行われ、住民の約8割が独立を選んだ。しかしその後、独立反対派の武力勢力により治安が悪化。国連の協力を得て2002年によりやく独立を果たした。アジアで最も清潔で安全な水源の確保に苦しむ国と言われている。

特に農村部では水や衛生などの基本的サービスが十分に届いていない。毎日のように女性と子どもが約1時間かけて遠くの水源まで水を汲みに行くことを余儀なくされ、飲み水に汚れた水源が近い集落では、近くの不衛生な水を飲食用に使用しているところもあるという。東ティモールの乳児1歳未満死亡率は出生1,000人中あたり45人、5歳未満死亡率は出生1,000人中あたり53人。衛生的な水を手に入れないという状況が、下痢性疾患や

感染症を引き起こし、子どもが亡くなる大きな原因の一つになっている。

6基の重力式給水システムから、重力式給水システム(GFS)を設置する。すでに着手されている2基は、9月の連水予定となっている。設備は、険しい斜面が多い地形に合わせて、標高の高い水源から標高の低いコミュニティを利用して水を供給する仕組みで、パイプでつなぎ、重力を利用して水を供給する仕組み。二酸化炭素を排出せず、環境にやさしいシステムだ。

GFSの設置により、継続して安全な水を届けることが

東ティモール民主共和国  
●面積 約1万4900km<sup>2</sup>  
●人口 121.2万人(2014年)  
●首都 ディリ  
●特産品 コーヒー豆、綿織物「タイス」

長い植民地時代から独立した若い国  
東ティモール民主共和国は、ティモール島の東半分を占める山岳部が多い島国。16世紀前半のポルトガルの始まり、長く植民地の歴史が続いた。1999年には分離独立を問う住民投票が行われ、住民の約8割が独立を選んだ。しかしその後、独立反対派の武力勢力により治安が悪化。国連の協力を得て2002年によりやく独立を果たした。アジアで最も清潔で安全な水源の確保に苦しむ国と言われている。

### 困窮する水事情を紹介 広がる支援への理解

東ティモール視察報告会



CWPで水環境設備の支援を進めている東ティモールの国と活動内容について知ってもらおうと、視察団による報告会が1月28日夜、大野市内で開催された。報告に先立って、ユニセフ・東ティモール事務所の元代表、久木田純・関西学院大客員教授が同国の歴史や地理、文化を紹介。東ティモールが抱える課題などを解説した。視察団が東ティモールを訪れたのは昨年10月、今津佐朗市長ら市職員3人が日本ユニセフ協会職員らとともに、政府機関や支援を進めている集落を視察した。報告会では、子どもたちが水を得るためにポリ容器を手に急斜面を往復する場面、水汲み場に長蛇の列ができていく場面が映し出され、集まった市民約50人がスライド説明を熱心に聞き入った。視察団の報告を受けて「支援するということは、与えるだけでなく、共生することが大切」と久木田教授。同行した市職員は子どもたちとサッカーを楽しんだ体験から、市民レベルで理解する大切さを訴え、今後は現地の人々と直接交流できる機会を設けたいと話した。市内で管工事業を営む男性は「現地の人々を大野に呼んでもらえれば、水道設備の修理方法など、自分たちが技術を直接教えた」など積極的な意見も出た。今副市長は「子どもたちの目の輝きが強く印象に残っている。あの輝きを守るために支援には大きな価値があり、これをみんなで共有したい」と話して報告会を締めた。

今後の大野のイベント  
・結の花まつり 4月1日(土)～5月21日(日) 市内一円  
・七間朝市山菜フードビア 5月13日(土)～14日(日) 七間通り  
・第3回大野の水と未来を語る集い 5月14日(日) 学びの里いりん講堂  
・九頭電新緑まつり 5月20日(土)～21日(日) 九頭電国民体育館  
www.city.ono.fukui.jp

### 越前おおの

# 水の巡りに感謝するまち。 水の箱庭、越前おおの。



水が巡る、水の箱庭、越前おおの。Carrying Water Projectのシンボルとして描いたのは、盆地にもたらされた豊かな地下水に支えられる、まちの姿です。その類い稀なる水循環環境は今、まちに潤いと誇りを生み、かつて味わった干戸枯れの苦しみは、水を守る大切さと、恵みに感謝する思いを強くしました。水を次の世代へ守り育てていくこと。水への恩返しを、世界に向けて行っていくこと。Carrying Water Projectの活動は、水が巡るように途絶えることなく未来へ注がれていきます。

水のことが、学ぼう。  
「水のがっこう」  
将来的な水問題の解決に向けて、子どもたちへの出張授業や、教材等の作成を通して人材育成、研究に必要な知見の集約を進めています。

水のおいしさを名前に。  
「水をたべるレストラン」  
第1弾として市内15の菓子店が「水まんじゅう」を販売。水の清涼感が味わえると話題に。米、そば、醤油、酒など、名水が育む産品の新たな展開を図っていきます。

ユニセフと進める  
「東ティモールへの水支援」  
市が募る寄付を財源に、現地に給水施設を設置支援する事業。支援を通じ、水のありがたさを世界に伝えていきます。

水への感謝を、共に。賛同者を募集しています。  
水質保全・環境保全への取り組みや、企業に向けた水の出張授業の展開など、共に「水への恩返し」をしていただける個人、企業、団体等を募集。ご寄付も広く募っています。  
大野市役所水再生対策室 TEL/0779-64-4813  
www.carrying-water-project.jp

水への恩返し  
Carrying Water Project